

文字の入門は漢字から

“易から難へ”ということは教育の当然の手順です。ですから、やさしい漢字を先に学習し、覚えにくいかなを後にするのは、その意味で当然のことと言えます。

しかし、それ以上に大切なことは「漢字を先に学ばせる」ことの価値です。これはとても大切なことです。

かなを先に覚え、かな書きの本から読み始めた子供と、漢字を先に覚え、漢字かな混じり文から読み始めた子供とでは、読書力の育ち方が全く違うからです。

漢字かな混じり文は、すでに述べましたように、実に読みやすく、意味がわかりやすいものですから、ここからはいった子どもは、読書を楽しんでします。だから、読書力がたちまち向上して、すぐに大人にも及ばないほどになります。これに対して、かなばかりの文は、読みにくく、ゆっくり読んでも意味が取りにくいものですから、読書が少しも楽しいものになりません。楽しくない読書は、読む気がしないので、読書力がつかない、というわけです。

「きのうわたくしはとうきょうえきへおじさんのみおくりにいきました」

こんな簡単な文章でも、子どもに読ませて、「いつ、だれが、どこへ、何しに行ったか」を尋ねてみますと、さっぱり答えられません。

だから、学校の国語学習では、読解指導と称して、「これはいつのお話ですか」「誰のお話ですか」「どこへ行きましたか」などと一々確かめています。また、こんな質問によって、国語の力をテストしているのです。

「昨日私は東京駅へ伯父さんの見送りに行きました」という表記になりますと、すらすら読めて、読むなり内容がつかめてしまいます。

「き、の、う、わ、た、く、し、は……」という読み方では、終わりまで読んでも意味がわかるはずがありません。だから、第二章の3で述べましたが、算数の文章題も解けないのだということになるのです。

日本の文章は、一つ一つの言葉が、最後の言葉と結びついていて、隣同士は関係ありません。例えば、「昨日行きました」「私は行きました」「東京駅へ行きました」……というように、次々に積み重ねられた言葉は、お互いには無関係で、最後の「行きました」に結びついているのです。

ですから、一字一字はもちろんのこと、一語一語に止まっていたのでは、文意がわかりません。早く一息に文末まで読み通さないと、文の組立てがはっきりとわからないのです。

かなばかりの文がわかりにくいのは、こういう理由があるからです。反対に、漢字かな混じり文だと一息に文末まで読み通せるので、文意がはっきりわかるのです。

ですから、幼児には最初に漢字かな混じり文を与えて、読むことの楽しさを知らせなければなりません。